

新製品発売のご案内

[エソテリック名盤復刻シリーズ]

ストラヴィンスキー：バレエ《春の祭典》&《火の鳥》(1910年全曲版)

ピエール・ブーレーズ(指揮) クリーヴランド管弦楽団、シカゴ交響楽団

リムスキー=コルサコフ：シェエラザード

ムソルグスキー：歌劇《ホヴァンシチナ》からペルシャの女奴隷たちの踊り

格林カ歌劇《ルスランとリュドミラ》序曲

ボロディン：歌劇《イーゴリ公》からダツタン人の踊り

エルネスト・アンセルメ(指揮) スイス・ロマンド管弦楽団

エソテリック独占販売 2015年3月10日 発売

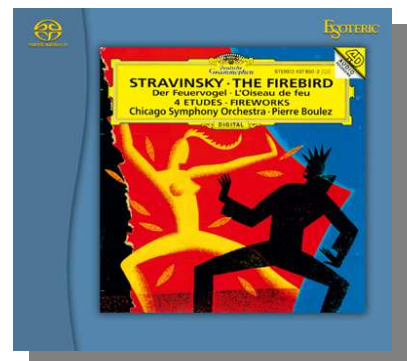
ストラヴィンスキー：

バレエ《春の祭典》&《火の鳥》(1910年全曲版)

ピエール・ブーレーズ(指揮)

クリーヴランド管弦楽団、シカゴ交響楽団

- 品番:ESSG-90118
- 仕様:Super Audio CD ハイブリッド
- 定価:3,143 円+税
- POS:4907034 219599
- レーベル:DG(ドイツ・グラモフォン)
- 音源提供:ユニバーサルミュージック合同会社
- ジャンル:管弦楽曲



リムスキー=コルサコフ：シェエラザード

ムソルグスキー：歌劇《ホヴァンシチナ》からペルシャの女奴隷たちの踊り

格林カ歌劇《ルスランとリュドミラ》序曲

ボロディン：歌劇《イーゴリ公》からダツタン人の踊り

エルネスト・アンセルメ(指揮)

スイス・ロマンド管弦楽団

- 品番:ESSD-90119
- 仕様:Super Audio CD ハイブリッド
- 定価:3,143 円+税
- POS:4907034 219605
- レーベル:英 DECCA
- 音源提供:ユニバーサルミュージック合同会社
- ジャンル:管弦楽曲



DSD MASTERING/Super Audio CD 層:2 チャンネル・ステレオ[マルチなし]

美麗豪華・紙製デジパック・パッケージ使用

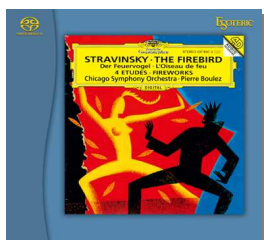
“Super Audio CD”と“DSD”は登録商標です。

エソテリック株式会社(代表取締役社長 勝村 治司)は、「名盤復刻シリーズ」Super Audio CDハイブリッド盤2作品を発売開始いたします。

今回の2作品は、エソテリック定評の丁寧なマスタリング作業によってSuper Audio CD化され、音質の向上はもとより、作品が本来備えた音楽的魅力を改めて浮き彫りにし、新たなる感動を約束するものに仕上がっています。

この2作品はエソテリックの独占販売で、主にオーディオ販売店で販売されます。

[アルバムの特徴]



ストラヴィンスキー：バレエ《春の祭典》&《火の鳥》

(1910年全曲版)

ピエール・ブーレーズ(指揮)

クリーヴランド管弦楽団、シカゴ交響楽団

指揮者としてのブーレーズの復活と円熟を鮮烈に印象付けた90年代のストラヴィンスキー・チクルス最上の名演。ブーレーズ90歳を寿ぎ、初の Super Audio CD ハイブリッド化(*)が実現。 *2015年2月現在

■クラシック音楽界の巨人、ブーレーズ

フランスを代表する作曲家・指揮者・音楽学者で、クラシック音楽界の巨人ともいふべき、ピエール・ブーレーズ(1925.3.25 フランス、モンブリゾン生まれ)。今年 90 歳を迎え、彼が作曲家として生み出してきた作品や指揮者として残してきた録音に改めて大きな注目が集まっています。

作曲家だったブーレーズが本格的に指揮を始めたのは 1958 年、ドイツのバーデン・バーデンでのこと。その後のヨーロッパでの活躍ぶりを知った巨匠ジョージ・セルの招きで、1965 年にクリーヴランド管弦楽団を指揮してアメリカ・デビューを果たしています。1967 年～72 年にかけては同団の首席客演指揮者およびミュージック・アドヴァイザーをつとめ、病弱なセルの補佐役を果たしつつ、セル亡き後はこのオーケストラを支え、次の音楽監督となったロリン・マゼールへと橋渡しをしました。1971 年には BBC 交響楽団の首席指揮者、バーンスタインの後任としてニューヨーク・フィルの音楽監督に同時に就任し、名実ともに 20 世紀を代表する指揮者としての地位を築き上げました。1977 年にはパリの IRCAM を設立、所長に就任し、そのアンサンブルであったアンサンブル・アンテルコンタンポランとの活動が始まります。

■指揮者ブーレーズの復活

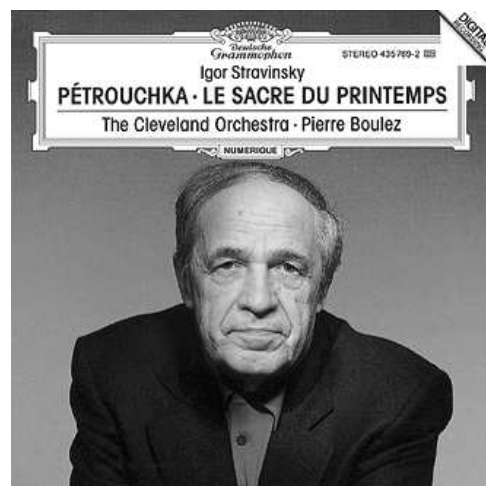
IRCAM 所長としての活動を優先させるため通常のオーケストラとの指揮活動を減らすようになったブーレーズが、再び指揮にも力を入れ始めるのは IRCAM の所長を辞した 1991 年以降のこと。これと軌を一にするのがドイツ・グラモフォンとの専属契約でした。この契約によって、マーラー、ドビュッシー、ラヴェル、ストラヴィンスキー、バルトークなど、指揮者としてのブーレーズのレパートリーの大半が、ウィーン・フィル、ベルリン・フィル、コンセルトヘボウ管弦楽団、シカゴ交響楽団、クリーヴランド管弦楽団などの欧米のメジャー・オーケストラとともに最新のデジタル・テクノロジーで収録されることになり、円熟味を加えた指揮者ブーレーズの復活を世界的に印象付けることになりました。

その第 1 弾となったのが、当アルバムに収録された 1991 年録音のクリーヴランド管弦楽団とのストラヴィンスキー「春の祭典」であり、その翌年にシカゴ交響楽団と収録されたのが「火の鳥」です。この 2 つの演奏のカップリングが、今回の Super Audio CD ハイブリッド化で初めて(*)実現します。*2015年2月現在

■「ハルサイ」指揮者ブーレーズ

「ブーレーズといえばハルサイ」「ハルサイといえばブーレーズ」と言われるほど、ストラヴィンスキーの「春の祭典」はブーレーズの指揮者としてのイメージを広く知らしめる上で大きな役割を果たした因縁の作品といえるでしょう。

ブーレーズは指揮者としての活動の初期、1963年にフランス国立放送管弦楽団と「春の祭典」を録音しましたが、これはブーレーズが通常の交響楽団との最初の録音でもありました。ブーレーズの演奏の特徴である知的・分析的な作品解釈、余剰を排し作品そのものの音響や構造の特徴を露わにする明晰な音づくりはまさに革命的で、「春の祭典」という未曾有の作品からそれまでの演奏では聴くことのできなかつた魅力を引き出したのでした。その後1966年、パリ・オペラ座におけるベルク「ヴォツェック」の衝撃的な上演と並行して行われた同曲の全曲録音以降、アメリカのメジャー・レーベルの雄、コロムビア・レコードで継続的な録音活動を行なうようになったブーレーズは、1969年、最晩年のジョージ・セルに乞われて首席客演指揮者を務めていたクリーヴランド管弦楽団と、2度目の「春の祭典」の録音を行ないます。ステレオのステージを左右いっぱい展開し、オーケストラの各パートを鮮明に収録したコロムビアのサウンドは、ブーレーズの明晰・明快な音楽作りとこれ以上ないほどにマッチし、コンサートとは離れたところで音楽を味わう録音芸術としての各アルバムの価値を高め、録音アーティストとしてのブーレーズの魅力を際立たせました。



ピエール・ブーレーズ
《春の祭典》(カップリング曲:《ペトルーシュカ》)の初出 CD

■ 22年ぶりの再録音

そして、その22年後に同じクリーヴランド管弦楽団と再録音したのがドイツ・グラモフォンでの専属契約第1弾となった「春の祭典」だったというのも、ブーレーズらしい選択だったといえるでしょう。

オーケストラの本拠地で、響きの少ないセヴェランス・ホールで細部まで明晰に収録された1969年のコロムビア盤に対し、1991年盤は、より響きの多い録音会場であるメイソニック・オーデトリウムで収録され、ドイツ・グラモフォンらしいコンサート・プレゼン的な全体の響きが重視されています。

ブーレーズの音楽作りの核心である精緻なバランス作りはそのままに、よりスケールの大きな解釈が聴けるのが大きな特徴といえるでしょう。

■ 「火の鳥」のバレエ全曲盤の魅力を開示

カップリングの「火の鳥」も、ブーレーズのトレードマークの一つ。「春の祭典」とは異なり、1910年に初演されて以来、オリジナルのバレエ全曲盤のほか、年代の異なる3つの組曲が存在する「火の鳥」では、どの楽譜を選ぶかによって指揮者の選択眼が問われます。ブーレーズは「火の鳥」をストラヴィンスキーが最初に構想した4管編成で演奏すべきものと考えており、1967年にBBC交響楽団とコロムビアに録音した際にはバレエ全曲版からそのまま編まれた1910年版の組曲という非常に珍しい版を使い、さらに1975年にはニューヨーク・フィルハーモニックとバレエ全曲版を録音しています。

アナログ時代の決定盤とされたそのニューヨーク・フィル盤から17年後、オーケストラをシカゴ交響楽団に変えて録音した当盤は、シカゴ響の持つ圧倒的なヴィルトゥオジティを全開させ、精密でありながらも骨太で密度の濃い響きを実現させている点が聴きものです。アナログ時代にライナーやショルティの指揮で幾多の名盤を生み出してきたシカゴのオーケストラ・ホールは、オーケストラの各パートの明晰さを保ちながら、トゥッティでのスケール感の豊かさを感じさせ、まさにオーケストラを聴く醍醐味を堪能することが出来ます。

■ 最高の状態での Super Audio CD ハイブリッド化が実現

今回の Super Audio CD ハイブリッド化に当たっては、これまでのエソテリック企画同様、使用するマスターの選定から、最終的な DSD マスタリングの行程に至るまで、妥協を排した作業が行われています。特に DSD マスタリングにあたっては、DA コンバーターとルビジウムクロックジェネレーターに、入念に調整されたエソテリック・ブランドの最高級機材を投入、また同社の MEXCEL ケーブルを惜しげもなく使用することで、貴重な音楽情報を余すところなくディスク化することができました。

■ 「最初の音から最後の音、いや休符にいたるまでまったく曖昧さを残さない」

「ブーレーズの音楽は最初の音から最後の音、いや休符にいたるまでまったく曖昧さを残さない。1991年に録音された『春の祭典』では幾分テンポが動いただけで、以前の録音と解釈の基本的な変

化はない。だが、かつてよりダイナミックな動きが強調され、エネルギッシュで健康的な演奏は、バレエの情景をまざまざとよみがえらせて、わくわくさせる。」(『クラシック名盤大全 管弦楽曲編』、1998年)

「(『火の鳥』は)シカゴ響の怪物的なスケールと、名人的な個人技を含む超絶テクニックの双方を、ブーレーズの精緻なリードが文字通りフルに引き出し、結びつけているところにこの快演の鍵がある。特殊楽器入り大編成オケの響きの魅力満載。」(『クラシック名盤大全 管弦楽曲編』、1998年)

「ブーレーズのストラヴィンスキーはじつにおもしろい。バレエのシーンがオーヴァーラップしていく音楽の並列的な構成が、スリルいっぱい音響空間へとみごとにまとめられている。ロシアの爆発するような春の訪れを描いた「春の祭典」のリズムの明晰さと奔放なエネルギーの発散。これ以上の演奏はなかなか望めない名演である。以前の解釈と根本的な解釈の違いはない。しかしブーレーズの指揮者としての円熟を示すかのように、肩の力が抜けて表現にも余裕が出てきた感じで、クリーヴランド管弦楽団の精度が向上したのと相まって、健康的に音群が炸裂していく。スケールもはるかに大きく感じられる。」(『ONTOMO MOOK クラシック不滅の名盤 800』、1997年)

[収録曲]

イーゴル・ストラヴィンスキー

バレエ音楽「春の祭典」

■第1部:大地礼賛

- 1.序奏
- 2.春のきざし(乙女たちの踊り)
- 3.誘拐
- 4.春の踊り
- 5.敵の都の人々の戯れ
- 6.賢人の行列～大地への口づけ～賢人
- 7.大地の踊り

■第2部:いけにえ

- 8.序奏
- 9.乙女たちの神秘的集い
- 10.いけにえへの讃美
- 11.祖先の呼び出し
- 12.祖先の儀式
- 13.いけにえの踊り

バレエ音楽「火の鳥」(1910年全曲版)

- 14.序奏

第1場

- 15.カステイの魔法の庭園
- 16.イワンに追われた火の鳥の出現
- 17.火の鳥の踊り
- 18.イワンに捕えられる火の鳥
- 19.火の鳥の嘆願～魔法にかけられた13人の王女たちの登場
- 20.金のリンゴと戯れる王女たち
- 21.イワン王子の突然の登場
- 22.王女たちの Rond
- 23.夜明け～カステイ城内に入るイワン王子
- 24.魔法のカリヨン～カステイの番兵の怪物たちの登場、イワンの捕獲～不死身の魔王カステイ登場～カステイとイワンの対話～王女たちのとりなし～火の鳥の出現
- 25.火の鳥の魔法にかかったカステイの手下たちの踊り
- 26.カステイ一党の凶悪な踊り
- 27.火の鳥の子守歌～カステイのめざめ～カステイの死～深い闇

第2場

- 28.カステイの城と魔法の消滅～石にされていた騎士たちの復活～大団円

[演奏]

クリーヴランド管弦楽団(春の祭典)

シカゴ交響楽団(火の鳥)

指揮:ピエール・ブーレーズ

[録音]1991年3月、クレーヴランド、メイソニック・オーデトリウム(春の祭典)、1992年12月、シカゴ、オーケストラ・ホール(火の鳥)

[オリジナル・レコーディング]

[レコーディング・プロデューサー]カールニアウグスト・ネーグラー

[バランス・エンジニア]ヘルムート・バーク(春の祭典)、ライナー・マイヤール(火の鳥)

[レコーディング・エンジニア]ヨープスト・エーバーハルト(火の鳥)

[エディティング]ラインヒルト・シュミット、アンドルー・ウェドマン(春の祭典)、ライナー・ヘップボーン(火の鳥)

[Super Audio CD プロデューサー]大間知基彰(エソテリック株式会社) [Super Audio CD リマスタリング・エンジニア]

杉本一家(ピクチャークリエイティブメディア株式会社、マスタリングセンター) [Super Audio CD オーサリング]藤田厚夫

(有限会社エフ) [解説] 諸石幸生 柴田龍一 [企画・販売]エソテリック株式会社 [企画・協力]東京電化株式会社

[アルバムの特徴]



リムスキー=ニコルサコフ:シェエラザード

ムソルグスキー:歌劇《ホヴァンシチナ》からペルシャの女奴隷たちの踊り

グリンカ歌劇《ルスランとリュドミラ》序曲

ボロディン:歌劇《イーゴリ公》からダッタン人の踊り

エルネスト・アンセルメ(指揮)

スイス・ロマン管弦楽団

作品から精妙な色彩の輝きを引き出す名匠アンセルメの手腕を鮮烈に刻印したアナログ時代の超定番。黄金時代のデッカ・サウンドの粋を極めた名録音。

■精緻で色彩的な演奏で一時代を築いた名指揮者アンセルメ

スイスの名指揮者エルネスト・アンセルメ(1883.11.11-1969.2.20)は、ディアギレフ率いるロシア・バレエ団の指揮者として、ストラヴィンスキー「兵士の物語」「うぐいす」「プルチネルラ」、ファリャ「三角帽子」、プロコフィエフ「道化師」、サティ「パレード」などの20世紀前半の重要作を次々初演し、また何よりもスイス・ロマン管弦楽団の創設者(1919年)にして音楽監督としてこのオーケストラを世界的な存在に育て上げたことで知られています。

1946年から専属契約を結んだデッカ・レーベルへの膨大な録音を行ない、フランス音楽、ロシア音楽、20世紀音楽、そしてドイツ・オーストリア音楽までを網羅。その中には、優れた録音技術(モノラル時代は ffr = full frequency range recording 広帯域録音⇒ステレオ時代には fss = full frequency stereo sound)と相俟って、LP時代に優秀録音として高い評価を得たものが数多くあります。



■ロシア・バレエ団所縁の「シェエラザード」

当アルバムは、当シリーズでも2008年にSACDハイブリッドとして発売し好評をいただいた「三角帽子」と並び、数多いアンセルメの録音の中でも殊更評価が高く、アナログ時代を通じて「シェエラザード」の代表盤とされていた歴史的名盤です。1960年の録音で、アンセルメにとって1952年(モノラル)と1954年9月(ステレオ)のパリ音楽院管弦楽団との2種類の録音以来の再録音となったものです。ステレオ期のアンセルメ録音を一手に引き受けたプロデューサーのジェームズ・ウォーカーとデッカの

ステレオ録音の生みの親であるロイ・ウォレスが組んだ名録音でもあります。

また、「シェエラザード」は、アンセルメが指揮者として世界的な注目を浴びるきっかけとなったセルゲイ・ディアギレフ率いるロシア・バレエ団での活動とも所縁の深い演目であり、アコースティック時代だった1916年にアメリカ・コロンビアのためにロシア・バレエ団のオーケストラとともに行った録音でも第1楽章と第4楽章の抜粋が含まれていました。これはアンセルメにとって生涯初めての録音となったもので、その意味でも「シェエラザード」はアンセルメにとって重要な作品であり続けたといえるでしょう。

カップリングの「ダッタン人の踊り」は LP 初出時から組み合わせられていたもので、そのほかのロシア音楽の名品は1964年に録音された「Russian Delights」という小品集に含まれていたものです。

■ デッカが愛用した伝説の名ホール、ヴィクトリア・ホールにおける名録音

アンセルメとスイス・ロマンド管弦楽団によるデッカへの録音は、基本的にオーケストラの本拠地であったジュネーヴのヴィクトリア・ホールで行われました。19世紀にジュネーヴ駐留のイギリス総領事によって建立されたこのホールは、演奏会場として優れた音響を誇るのみならず、レコーディングの会場としても最適でした。録音技術に高い関心を持ち、録音セッションにおいてエンジニアに非常に協力的だったアンセルメの録音は当初から高水準で知られており、アンセルメが1954年5月、ヴィクトリア・ホールで行なわれたデッカによる初めてのステレオ録音のセッションに起用されたのも自然な成り行きでした。

そしてその時収録されたリムスキー＝コルサコフの交響組曲「アンタール」以来、この伝説のホールで幾多の名録音が生み出されることになりました。ウィーンのゾフィエンザール、ロンドンのキングスウェイホールなどとともに、細部の音に至るまで明晰に収録しようとするデッカの録音ポリシーには理想的な会場で、そこでの録音は、オーケストレーションの綾や空間性を生々しく再現する骨太なデッカ・サウンドの代名詞ともなりました。

■ 最高の状態での Super Audio CD ハイブリッド化が実現

アンセルメの「シェエラザード」は、デジタル初期から CD 化され、さらに2002年には DECCA ORIGINALS で24bit/96kHzリマスタリングが行なわれていますが、今回は初のDSDリマスタリングとなります(2015年2月現在)。

今回の Super Audio CD ハイブリッド化に当たっては、これまでのエソテリック企画同様、使用するマスターの選定から、最終的な DSD マスタリングの行程に至るまで、妥協を排した作業が行われています。特に DSD マスタリングにあたっては、DA コンバーターとルビジウムクロックジェネレーターに、入念に調整されたエソテリック・ブランドの最高級機材を投入、また同社の MEXCEL ケーブルを惜しげもなく使用することで、貴重な音楽情報を余すところなくディスク化することができました。

■ 「最初の音から最後の音、いや休符にいたるまでまったく曖昧さを残さない」

「LP のジャケットを飾っていたドラクロアの名画とともに忘れがたい一枚。オーケストラをリードするここでのアンセルメの手腕は、まさに巨匠のそれと呼ぶにふさわしい。どんな局面でもオーケストラを決して煽らず、一貫して丹念な彫琢を貫く。とりわけ音色感覚をきわめてデリケートに駆使して、この曲にこんなにもあったのかと思うほどの複雑な妙味を掘り起こしているのである。スイス・ロマンド管もそれに応えて、当時の第一級の楽団としての力量をいかんなく発揮している。とくに管セクションが好調。」(『クラシック名盤大全 管弦楽曲編』、1998年)

「『シェエラザード』には音響的な魅力を追うあまりけばけばしさと隣り合わせの、音楽的にはむしろ内容の薄い演奏が少なくないが、このアンセルメ盤はまさにそれとは対極的な位置を占める典型的な一枚である。抑え気味の表現の中にも、丹念な彫琢とデリケートな音色感覚から生み出される実にさまざまな妙味がいっぱい、アンセルメの指揮術の奥の手をそこにみる思いがする。」(『レコード芸術別冊 クラシック・レコードブック Vol.2 管弦楽曲編』、1985年)

[収録曲]

ニコライ・リムスキー=コルサコフ

交響組曲《シェエラザード》作品 35

- 1 I. 海とシンドバットの船
- 2 II. カランダール王子の物語
- 3 III. 若い王子と王女
- 4 IV. バグダットの祭り——海——青銅の騎士の立つ岩での難破——終曲

モデスト・ムソルグスキー

- 5 歌劇《ホヴァンシチナ》からベルシヤの女奴隷たちの踊り

ミハイル・グリンカ

- 6 歌劇《ルスランとリュドミラ》序曲

アレクサンドル・ボロディン

歌劇《イーゴリ公》から

- 7 ダツタン人の娘たちの踊り
- 8 ダツタン人の踊り

[演奏]

ローランド・フェニヴェス(ヴァイオリン)[シェエラザード]

ローザヌ青少年合唱団、ローザン放送合唱団(合唱指揮:アンドレ・シャルレ)[イーゴリ公]

スイス・ロマンド管弦楽団

指揮:エルネスト・アンセルメ

[録音]1960年11月(シェエラザード、イーゴリ公)、1964年4月(ホヴァンシチナ、ルスランとリュドミラ)、ジュネーヴ、ヴィクトリア・ホール

[初出]SXL2268(シェエラザード、イーゴリ公)、SXL6119(ホヴァンシチナ、ルスランとリュドミラ)

[日本盤初出]SLC1064(1961年12月、シェエラザード、イーゴリ公)

[オリジナル・レコーディング]

[レコーディング・プロデューサー]ジェームズ・ウォーカー(シェエラザード、イーゴリ公)、マイケル・プレムナー(ホヴァンシチナ、ルスランとリュドミラ)

[レコーディング・エンジニア]ロイ・ウォレス(シェエラザード、イーゴリ公)、ジェームズ・ロック(ホヴァンシチナ、ルスランとリュドミラ)

[Super Audio CD プロデューサー]大間知基彰(エソテリック株式会社) [Super Audio CD リマスタリング・エンジニア]

杉本一家(ピクチャークリエイティブメディア株式会社、マスタリングセンター) [Super Audio CD オーサリング]藤田厚夫(有限会社エフ) [解説]諸石幸生 志鳥栄八郎 [企画・販売]エソテリック株式会社 [企画・協力]東京電化株式会社

エソテリック独占販売

エソテリック特約店にてお求めください。

エソテリック特約店につきましては弊社ホームページの「製品展示・販売店のご案内」または「AVお客様相談室」へお問い合わせください。

ホームページ 製品展示・販売店のご案内 <http://www.esoteric.jp/support/shop/>

報道関係からのお問い合わせ 掲載用の画像データなどのご用命は

エソテリック株式会社 販売推進部

Tel 042(356)9230/Fax 042(356)9240

(PM6:00以降はTel 042(356)9238へお願いいたします。)

お客様からのお問い合わせは

AVお客様相談室

受付時間:9:30~12:00/13:00~17:00(土・日・祝日・弊社休業日を除く)

0570-000-701(ナビダイヤル) PHS・IP電話からは Tel 042(356)9235/Fax 042(356)9242